

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛友会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

075-753-5270

www.rakuyukai.org

たまには群れよう

東京支部前支部長

角田

恭之

(昭58年卒)



今年6月まで東京支部長を務めておりました角田です。

私は昭和58年学部卒、昭和60年修士卒で、学部・修士ともに川端研究室に所属していました。卒業後NTTに入社しましたが、ちょうど電電公社が民営化された年でした。入社以来、私は一貫してコンピュータシステムの構築・運用を事業領域とする組織（後のNTTデータ）で仕事をしてきました。この仕事は私が大学時代に勉強や研究した内容とは異なるも

のであり、このような仕事に携わることになったのは全くの偶然でしたが、やってみればなんとかなるもので、大変なこともありましたが、やりがいのある仕事をさせてもらえたと思っています。

NTTから分社したNTTデータは、事業内容をシステムの設計・構築からサービスの提供やデータセンタ事業へとその幅を広げ、M&Aを活用したグローバル展開により、事業規模は分社当時から10倍以上に拡大し、社員構成では日本人より日本人以外の社員の方が多いという状況になりました。そして民営化から40年が経過した今、NTTデータはNTTの完全子会社となることになりました。電電公社の民営化の議論において当時の人たちがどのような未来を描いていたかは私の知るところで

はありませんが、その後の展開を思い起こすと感慨深いものがあります。

さて、話を洛友会東京支部のことについてしたいと思います。東京支部の歴史をたどると初代支部長の就任が昭和28年で私が第64代となります。諸先輩方々の努力により脈々と受け継がれてきた歴史の重みを認識し、これを未来に向けて継続、発展させていかなければと思っています。東京支部の会員数は令和6年度末現在1,942人で、これは全会員数の約30%、支部では関西支部につぐ規模となっています。主な活動内容を紹介しますと、支部全体で実施するイベントとしては支部総会、秋の講演会、若手交流会、春の見学会です。このほかに拡大クラス会、趣味の会という活動があります。拡大クラス会は昭和35年・平成21年までの卒業生を5年毎にグループ化し懇親会等の活動を実施しており、卒業年次の異なる会員が集まる仕組みとして会員間の縦の繋がりをつくる上で重要な機能を果たしています。趣味の会としては囲碁会、麻雀会、ゴルフ会、洛語会、テニス会があり、それぞれ幹事役を務めていただいている方がいます。これらの活動については洛友会東京支部のホームページ

(<https://www.rakuyukai.org/tokyo/>)に紹介されていますのでご覧ください。

新型コロナウイルスが流行した時期には各種活動を制限せざるを得ず、総会はいももト開催、講演会や見学会は中止することとなりました。コロナが収束し、段階的に活動を再開してきましたが、昨年度若手交流会を再開し、コロナ前に実施していたすべてのイベントを実施することができました。コロナ流行時に総会、講演会をいももトで開催する方法を確立しましたが、コロナ収束後は会場で開催するとともに、いももトでの参加も可能とするハイブリッド方式で実施することになりました。これにより会場への参加が難しい方へも参加の道をひらき、あわせて東京支部以外の会員の方にもいももトで講演に参加していただくことも可能となりました。洛友会活動の認知度向上や会員サービス向上につながる取り組みだと思っています。

総会、講演会、見学会の再開については順調だったのですが、若手交流会は少々苦労しました。講演会と懇親会をセットにしたイベントであり、対象者を社会人になつて間もない会員を対象としているのですが、昨年度はコロナで実施しなかった期間を考慮して対象者の卒業年次の幅を3年間に広

げることとしました。準備段階では参加者が殺到したらどのように対応しようかなどと心配していましたが、結果は全く異なるものでした。出欠の締め切りが近づいた頃、参加希望者を取りまとめたところ数名という状況だったので。その後、幹事を中心に各方面から声掛けし予定に近い人数で開催することができましたが、以前から東京支部で課題認識されている、若手会員の洛友会イベントへの参加者が少ないという現実を実感することになりました。

参加希望者が集まらなかった原因としては会員の連絡先メールアドレスが最新化されていなかったり、ほとんど見ることもないメールアドレスが登録されていたりということもあつたようですが、それとは別に、以前から時々耳にすることのあった京都大学卒業生のある特性が影響しているのではないかと考えています。その特性とは「京都大学の卒業生は群れない」というものです。これについては、京大生は自立独自の精神を持ち仲間にもやみに迎合しないからだという解釈もあり、この特性を肯定的にとらえる向きもあるかもしれませんが、私はこの「群れない」という特性は、人生における様々な機会を逸することにつながるのではないかと懸念しています。

個人のキャリアの8割は予想しない偶発的なことによって決定される。これはスタンフォード大学のクラウンボルツ教授が提唱した計画的偶発理論 (Planned Happenstance Theory) の中で述べられています。偶然を計画的に設計し、自分のキャリアを良いものにしていくというもので、不確実で変化の激しい時代に適した考え方だと言われています。偶然の出来事をチャンスに変えていくための行動特性として次の五つ、①好奇心 (Curiosity)、②持続性 (Persistence)、③柔軟性 (Flexibility)、④楽観性 (Optimism)、⑤冒険心 (Risk Taking) が重要とされています。これはキャリアの面だけでなく、人生全般、例えば趣味や友人関係などにおいても同様だと思います。チャンスを広げるためには偶発的な事象につながるような場所やイベントに積極的に参加することが大切です。人と人の交流というのは偶発的な事象の中でも重要な要素の一つです。ある人との出会いがその後の人生を大きく変えたという話はよく耳にします。時には群れることも大切なのです。洛友会の各種イベントは、知識の獲得や趣味を楽しむだけでなく、人との交流の場を提供することにより、同期だけでなく卒業年

次の異なる会員相互の交流の機会を提供しています。そのような場に参加することにより、その後の人生に影響をあたえるような出会いがあるかもしれません。実際に私は講演会後の懇親会場で、参加した若手の会員から、今回のイベントは自分の今後の人生の決定において大変参考になるものであったという言葉を聞いたことがあります。このようなことを多くの会員の皆さんに経験していただければと思っています。

最後にもう一度申し上げます。

「京都大学の卒業生よ、たまには群れよう」

洛友会の活動が会員の皆様の豊かな人生に貢献できるものであることを願っています。

教室だより

学位記授与式

令和7年3月24日、電気電子工学科の卒業生送別会 (洛友会との共催) が開催されました。みやこめっせにおける全学の卒業式に引き続いて、電気総合館大講義室での学位記授与式が行われ、下田宏学科長より卒業生一人一人に対して学位記が手渡されました。



送別会は電気総合館4階の北図書室ラウンジコモンズにて行われ、教職員を交えての歓談が行われ、名残惜しさのなか137名の卒業生が巣立って行きました。



電気系修士学位授与式

令和7年3月24日 (月) に大学院学位授与式がみやこメッセで、引き続き電気系修士学位授与式が桂キャンパスで執り行われました。71名の方々が晴れて修士 (工学) となりました。

電気工学専攻40名

荒谷陸斗、有澤太喜、井崎壮、上垣柊季、江成涼、大江巧人、大久保琉登、大島夕侑、角谷大朗、片山夏樹、勝田慎平、加藤千晶、加藤雅也、金田ことの、河合敦紀、川染陸人、菊田康次、小林悠人、小山湧也、言美龍二郎、西藤俊暁、佐塚研太、實松大介、鈴木歩夢、宝本航大、寺西直希、波戸宏樹、林拓人、林遼一、東村敢、星川龍希、本多尚、松本康太郎、宮口祐誠、山下寛人、山根涼、山本哲也、山本真嘉、YANG QILANG、殷振興

電子工学専攻31名

有長一輝、和泉篤尚、岡城勇大、小川健志、河端真也、岸田駿人、桑原功太郎、小酒井翔太、小林宇翔、菰池真実、迫藤緒、高安愛登、竹村幸大、立岡克啓、田中聡記、谷口雄哉、玉井優、利光汐音、中井武尊、永江隆太、仲野秀栄、福重翔吾、堀良輔、





前田健太郎、宮田龍一、宮本将志、山下悟史、山本真央、和田隆佑、岡本悠太郎、斎藤凌矢

新入生歓迎茶話会

4月7日の桜が満開の中、京都市勧業館みやこめっせで京都大学の入学式が行われ、午後からは電気総合館にて電気電子工学科新入生ガイダンスが行われた。



ガイダンス終了後には、電気総合館4階のラウンジに新入生歓迎茶話会（洛友会共催）が行われた。学生会員として新たに入会した電気電子工学科の新入

生（134名）が約10名の教職員とともに、会場に参集した。

萩原朋道事務局長が挨拶され、洛友会の成り立ち、最近の取り組み、学生会員の意義などについて説明された。

お茶やジュースでの乾杯が終わると、たちまちに賑やかな声がか会場に溢れ出した。出身地、志望動機、下宿やサークルなどの話題で盛り上がり、教員との初めての対面で将来に対する夢などの話題が弾んだ。歓迎茶話会を通じて学生同士の輪も広がり、友人、仲間づくりの第一歩となったようである。



会員寄稿

会社員から大学教員に

なったいきさつ

尾崎 博一

（昭58年卒・北海道支部）



私は50歳の時に26年勤務した民間企業を退職し私立大学の教員になりました。10年前の洛友会会報第249号には「会社員から大学教員になって」と題する文章を寄稿し新しい職場に移った感想などを記しましたが、今回は教員になったそもそものいきさつをご紹介します。北北海道支部は会員数が少ないため、およそ10年周期で寄稿の依頼が回ってきます。再び似たようなタイトルで寄稿させていただくことをお許しいただきたく存じます。

私は1985年に修士を修了し、電機メーカーに就職し通信関係の部門に配属されました。以来、退職まで通信事業者向けの大容量光伝送装置の開発設計に従事しま

した。若いころは残業、残業の毎日よく徹夜もしましたが、仕事に面白かったこともあり、あまり苦痛は感じませんでした。しかし、ある時期から会社の業績が低迷し、特に所属していた事業本部の業績がひどく悪化したためその事業本部は解体され、別の事業本部に吸収合併されました。そこでは旧事業本部出身の社員は皆冷遇された。私の職場環境も非常に悪化しました。ちょうどそのころ私は体調を崩し3か月ほど会社を休まなければならなくなりました。42歳の厄年の時でした。療養している間に家族のことや先々のことをいろいろ考え、会社を辞めて転職することを決心しました。同僚にも会社を去る人が次々と現れ、特に若く優秀な人ほど早く去っていったことを覚えています。

転職先は大学とすぐに決めましたが、教授になるにはまず博士の学位が必要になります。研究所で3年ほど仕事をしたことはありましたが、ほとんどの期間は事業部門で過ごしたため、特許の登録件数は多かったものの論文は少なく、すぐに論文博士を取得することとは無理でした。そこで10年かけて転職する計画を立てました。まず、3年ほどかけて最新の技術を学び直し博士論文のテーマを決める、次に在職のままでこの大学

の博士課程に入り3年で博士の学位を取得する、さらに論文の投稿を続けて業績を作り、しかる後にどこかの大学の教員公募に応募する、という計画でした。もちろん会社には内緒です。

そのころ一般家庭にもブロードバンドインターネットが急速に普及し始めており、私も関係する装置を担当していましたので、インターネットの技術を深く勉強する中で博士論文のテーマを見つけることにしました。会社での業務は続いており普通に残業もしていましたので、勉強する時間は毎朝の出勤前と土日祝日だけでした。それでも3年ほどやっている中で博士論文のテーマになりそうなのが見つかり、在職のまま福島県の会津大学の博士課程に入学しました。入学に際しては大学から会社の同意が必要だと言われたため、やむなく上司に相談したところ、意外にもあっさり了承してもらえたことは幸運でした。研究の指導は洛友会の数年先輩でかつて同じ事業本部に所属し会社の勧めで教授として会津大に転出された先生にお願いしました。極めて優秀な方で転出されるときに「会社はこういう方を簡単に放出してしまつてよいのだろうか」と思ったことを覚えています。ともかくその先生の指導の下で学位取得をめざす

ことになりました。

会津大学はコンピュータサイエンスに特化し外国人が教員の4割を占めるユニークな大学で論文はすべて英語で書かなければなりません。学位の審査も英語で行われます。私は学会や国際会議、海外部門との打合せで何度も海外出張を経験していましたが、念のために週末には英会話学校に通って個人レッスンを受けました。今はどうなっているかわかりませんが、当時の会津大の博士学生には授業もなく通学の必要もなく、ひたすら論文誌にアクセプトされる論文を書くことだけが義務でした。主要論文誌に2本以上アクセプトされることと査読付きの国際会議で1件以上の発表を行うことが博士論文審査の前提条件でした。主要論文誌とは定義が曖昧なのですが、トムソン・ロイター社のマスタートジャーナルリストに載っている論文誌というのが一応の目安になっていました。3年間で博士を取れない学生も多く私も非常に心もとない状況でした。1本目の論文は比較的早くアクセプトされ国際会議での発表も済ませましたが、2本目以降の論文は査読に非常に時間がかかり、ようやくアクセプトの通知が届いたのは博士の予備審査の1週間前でした。ざりざりのところで審査を通過し博士

を取得することができました。49歳の時でした。

博士は取ったもののまだ研究業績はほとんど無いに等しく、これからしばらくはせせせと論文を書いて業績をつくっていくしかないと思っていたところ、たまたま郷里の北海道の大学(今勤めている大学)で教員を公募していることを知り無謀にも応募してみました。形だけの公募ということもよく聞かため、だめでもともとという気持ちでしたが、意外にも面接をするから来てほしいという連絡がありました。そして面接の後、採用するとの連絡があり、何という僥倖か博士取得から一年半後に教員になることができました。郷里には高齢で二人きりの両親もあり、転職で帰郷しそのサポートもできるという幸運に恵まれました。会社を去るときには周囲から随分羨ましがられましたが、大学に移ると給料は下がってしまいました。なお、退職の翌年度に会社は1万人の人員削減計画を発表しました。

以上が転職の顛末ですが、今思うと自分で多少の努力はしたものの私の場合は優れた指導教授のお陰とあとはほとんど運がよかったということに尽きると思います。なぜ採用されたのかは今も謎ですが、地元北海道出身者である

こと、企業での実務経験(特に特許)、会津大学で非常勤講師を務めていた経歴がプラスに作用したのではないかと想像しています。大学に来て14年が経過し、定年まで4年を残すのみとなりました。体力・知力・気力の衰えを感じる今日この頃ですが定年の日までしっかりと仕事をしていきたいと考えております。

第二の故郷、富山

山田 昌樹
(平23卒・関西支部)



〈はじめに〉

私は2014年に大学院を修了後、富山の化学品メーカー「日本カーバイド工業」にて6年間、セラミック基板の研究開発に従事しました。その間、立山連峰の雄大な自然や富山湾の豊かな海の幸に

触れ、日々の暮らしの中で四季の移ろいを感じながら働くことができました。また、多くの地元企業と交流する中で、日本の中小企業が有する高い技術力と、地域産業の大切さを肌で学びました。こうした体験を通じて、私は「日本の自然と技術を守る仕事したい」と強く感じ、現在は京都の実家である三昌製作所にて、再生可能エネルギーやエコカー向けの金属部品製造に取り組んでいます。本稿では、私にとって第二の故郷となった富山県の魅力について、4つの視点からご紹介いたします。



① 立山連峰と黒部峡谷が魅せる圧倒的な自然美

富山県に入るとまず出迎えてくれるのが、威厳を感じさせる立山連峰の雄姿です。立山は見る者を圧倒する景観であると同時に、登山者にも恵みを与えてくれます。

晴れた冬の日には、氷見海岸から海越しに立山を望むことができ、その荘厳な姿はまさに絶景です。車で山麓まで行き、ケーブルカーと電気バスを乗り継げば、標高約2,500mの食堂まで誰でも気軽にアクセスでき、雲海やチンゲルマなどの高山植物、さらには「山のアイドル」とも呼ばれるニホンライチョウにも出会えます。体力に自信のある方は、主峰・雄山（標高3,003m）への登山に挑戦すれば、黒部湖や雲海を見下ろしながら、山頂で一杯のカップヌードルを味わうという贅沢な時間も楽しめます。

さらに、黒部峡谷の景観を堪能するには、宇奈月温泉から出発する「黒部トロッコ鉄道」がおすすです。トロッコに揺られながら進むと、峡谷の美しさを間近に体験できます。終点の樺平から黒部ダムまでは、かつて関係者しか通れなかった「黒部キャニオンルート」が2024年に開通予定でしたが、同年の能登半島地震により一部が崩落し、現在は復旧作業中です（2025年5月時点）。このルートの途中には「高熱隧道」と呼ばれる熱気を感じられるトンネルがあります。これは1940年に仙人谷ダムを建設するための坑道として掘削されたもので、16.5℃の熱気とダイナマイトの

爆発事故など過酷な環境の中で300名を超える作業員が命を落としたと伝えられています。作家・吉村昭のノンフィクション小説『高熱隧道』には、当時の苦闘が生々しく描かれています。



② 富山湾の天然のいけすが育む

海の恵み

富山湾は、海岸からすぐ深海に至る独特の地形を持ち、数多くの美味なる海産物が水揚げされる「天然のいけす」と称されています。中でも、ゲンゲという深海魚はかつて漁網を傷つける厄介者として「下の下（げのげ）」と呼ばれていましたが、現在では「幻魚（げんげ）」として竜田揚げや雑炊で親しまれる人気食材となっています。漫画『美味しんぼ』の84巻では魚津市にある海鮮レストラン「海風亭」で提供される竜田揚げが紹介され、知名度を高めました。

もうひとつ特筆すべきは、富山で提供される生ガキです。一般的に加熱用のカキは栄養豊富な内湾で育てられる一方、生食用は清浄な沖合で養殖されます。富山では加熱用のカキを「海洋深層水」で洗浄することで、毒素を取り除きながら栄養を保持し、美味しく安全な生食用カキとして出荷しています。私自身も生ガキは苦手でしたが、富山の生ガキを食べてその印象が一変しました。他にも、シロエビやバイガイ、ベニズワイガニ、ブリなど多くの魚介が四季を彩ります。



③ 富山の幸を引き立てる美酒の魅力

富山には19の酒蔵があり、清らかな水と良質な米によって個性豊かな日本酒が醸されています。私は、魚介類との相性が抜群な辛口の「立山」を飲んで以来、日本酒が大好きになりました。なかでも、

おわら風の盆で有名な八尾町の玉旭酒造は、県花であるチューリップ由来の酵母や富山県独自の品種米「富富富（ふふふ）」を用いた意欲作を世に出しており、若手杜氏の挑戦が光ります。さらに、氷見市や魚津市には元々果樹園がありましたが、近年はワイナリーも増設しています。将来的には山梨県にも並ぶ、日本を代表するワイン産地へと成長することを期待しています。



④ 清らかな水が支えるものづくり

富山県には、YKK、不二越、アイシン、日医工などの大手メーカーが拠点を構えています。その背景には、北陸自動車道をはじめとする交通アクセスの良さと、精密加工に必要な豊富で清浄な水資源があります。水資源を活かし古くから高品質な酒や薬が盛んに作られることで、その容器である鋳

物やガラスの技術が発達しました。現在では、金属加工やめっき、樹脂成形、セラミックといった中小企業の高い技術力が、国内外の産業を支える重要な存在となっています。



〈おわりに〉

このように、富山県は豊かな自然と、それを活かした食・酒・産業の魅力が詰まった地域です。京都に戻った今も、年に一度は富山を訪れては、懐かしさと新たな発見に触れています。大学で得た知識と同様に、富山で過ごした6年間は、私の人生を形づくる大きな糧となりました。「聞く」「見る」だけでなく、「自ら体験すること」が、深い学びに繋がるのだと実感しています。

瑞宝双光章の叙勲

橋本 道哉

(昭33年卒)



私は昭和33年に電子工学科を卒業して日本国有鉄道(以下国鉄)に入社した橋本道哉です。令和7年春の叙勲に際しては、図らずも瑞宝章の叙勲を受けました。これも皆様の心暖かき御指導とご鞭撻の賜と感謝しています。洛友会の同期で同じ国鉄に入社された安原さんも以前に叙勲を受けておられます。洛友会同期で同じ勤務箇所に同時に入社した2人が偶然にも叙勲を受けたことは運命的な繋がりを感じます。

学生時代、安原さんと一緒に国鉄の技術研究所で学外実習を行いました。架線研究室長、信号研究室長、通信研究室長が洛友会の先輩で暖かく迎えて指導をして下さいました。二人共自動制御研究室で列車運行の自動制御について学外実習を行いました。実習が終わった時には二人共採用内定の通知を頂きました。

叙勲は、関係府省庁の長が各界の功労者を首相に推薦し、内閣府賞勲局による審査を経て受章者を閣議で決定します。候補者は公務に長年に亘り従事し、成績を上げた人が天皇陛下の裁可を受けて発令されます。これは私たち国民が唯一、天皇陛下から頂ける叙勲だそうです。私のような鉄道専門家については、国土交通大臣が内閣府に候補者を推薦しますが、叙勲の種類は瑞宝章です。JRからは自衛隊員や警察官のように第一線で命をかけて業務を遂行された現場の人とJR総研出身の研究者に限定されていました。今回は現業機関で仕事をした管理者・技術者も対象となり、私が第一号になりました。

私はフランス国鉄へ留学以後、海外鉄道の技術協力で8カ国、10件のプロジェクトに従事したことが評価されたようですが、私は多くの協力者が挙げってくれた成果を取り纏めただけで大した仕事はしていません。私はフランス語、英語およびスペイン語の通訳案内業(ガイド試験の合格)の資格を取得しており、外国からの国鉄への要人の訪問の接遇や外国人研修生の技術指導を直接行いました。

国鉄を退職してから技術士の資格を取り、技術士事務所を開設し、JICAの海外論文の抄録作成や

日本技術士会の翻訳センターで丸善から科学技術者の倫理に関する書籍を数冊翻訳出版を行いました。これらの丸善からの科学技術者の倫理関係の翻訳出版も日本の科学技術者に倫理観の育成に貢献したとして評価されたようです。

私が担当した最初の海外鉄道の技術協力プロジェクトは、イランのテヘラン・マシャッド(イスラム教の聖地)間1,300kmの新幹線建設でした。最初は先輩が担当することになり、準備を進めておりましたが、イラン国鉄のカウンターパートが外国語はフランス語しか話せないで、急遽フランス国鉄へ留学した経験がある私が交代しました。

設計が終わってから、リニア新幹線プロジェクトでも行っていないフイージビリティ・スタディを行うよう要請され、このプロジェクトが経済的にも財務的にもフイージブルであることを示しました。これは世銀のような国際金融機関から建設資金を借款するには必要であるとのことでした。

日本から国鉄の副総裁がイランまで来て我々が実施したプロジェクトのプレゼンテーションに参加してくれ、建設工事の準備を始めようとしたが、パーレビ国王が失脚し、ホメイニ革命が勃発したので中断しました。エンジニア

リング料金の1億円は全部回収することができました。

日本の大型プロジェクトでも殆んど実施していないプロジェクトのフイージビリティ・スタディを行ったことは私にとって以後の業務に非常に有益でした。洛友会の同期の住友商事に勤務されていた33年卒業の黒岩さんと35年卒業のイラン勤務を経験された曾根原さんにはイランでの仕事の進め方や輸出業務について色々教えていただき助かりました。

多くの有能な協力者に助けられ、家庭を犠牲にして、情熱をかけて実施したことが評価されて叙勲を受けることになったようです。

今回はJRの皆さんが私の業績を評価して推薦してくれたので叙勲を受けることになりました。私はJRの候補者の選定委員会にはどなたにも面識はありませんが、大勢の懇意にして下さった仲間が大して業績を上げていない私を強力に推薦してくれたようです。

5月14日の午前に国土交通省での伝達式で、賞状と勲章を授かり、午後から皇居で総理大臣が同席して天皇陛下の拝謁があり、記念写真を撮ってくださいます。

数多くの候補者の中から私を選んで推薦してくれた仲間の皆様と、業務の遂行に協力して下さい

た皆様には感謝の念に堪えません。伝達式には家内と共に招待され、天皇陛下の拝謁を受けますが、私にはこんなに嬉しいことはありません。我が家に取っても大きな名誉になります。私に協力してくれた皆さんのお陰で私のキャリアの最後に花を添えてくれました。



支部だより

関西支部総会報告

令和7年5月10日(土) 京都タワーホテルにおいて、関西支部総会が43名の参加を得て開催されました。



総会に先立ち、「フュージョンエネルギー開発の現状」と題して講演会が行われました。講演会では、京都大学教授の長崎 百伸先生(昭和61年卒)より、フュージョンすなわち核融合とは何かから始まり、京都大学が保有するプラズマ実験装置のご紹介を経て、未来のエネルギー源として期待されるフュージョン発電炉の開発に向けた課題などをご講義いただきました。研究の歴史は長く、幾多の課

題を乗り越えながらフュージョン発電炉の実用化に向けて着実に開発が進められている状況を拝聴し、研究に携わる先生方の熱い想いを感じることができました。

支部総会は、富岡総務幹事の司会のもと安東支部長のご挨拶で始まりました。令和6年度行事・決算報告、令和7年度行事計画・予算編成、役員改選等が審議され満場一致で承認されました。

令和7年度の新役員は、以下の各氏です。

支部長 西田 篤史

(昭和63年卒)

副支部長 井上 欣也

(平成元年卒)

総務幹事 玉田 浩一郎

(平成7年卒)

会計幹事 島田 茂樹

(平成7年卒)

続いて洛友会事務局長の萩原先生、電気電子工学科長の下田先生より洛友会本部の活動、電気系教室の現況についてご報告いただき、在学当時の記憶から雰囲気が一変したキャンパスの写真などをご紹介いただきました。

支部総会終了後には懇親会が開催されました。洛友会顧問の荒木先生のご挨拶の後、乾杯のご発声をいただきました。懇親会中は終始和やかな歓談の場となり、楽しい一時を過ごすことができました。

た。恒例の洛友会の歌を一同で斉唱し、最後に萩原先生より締めのご挨拶をいただいて散会となりました。

伊藤 薫(平21年卒) 記



九州支部総会報告

令和7年5月31日(土) 18時30分より、福岡市博多区のオリエンタルホテル福岡博多ステーションにて、九州支部総会を開催しました。今回は会員9名の参加に加え、本部来賓として土井俊哉先生をお迎えしました。

開会に先立ち、平成8年から平成12年まで洛友会九州支部長を務められ、当会の発展に大きく貢献された大園繁治さま(昭和34年卒)が本年1月にご逝去されたことを

受け、全員で黙とうを捧げ、ご冥福をお祈りしました。

総会は、工藤幹事(昭和62年卒)の司会により進行され、冒頭、能見支部長(昭和54年卒)からご挨拶がありました。挨拶では、これまでの支部活動への協力への感謝とともに、今後の九州支部のさらなる発展への期待が語られました。その後、会は議事次第に沿って円滑に進行し、令和6年度の活動実績・会計報告および令和7年度の活動計画・予算・役員案が示され、審議のうえ全会一致で承認されました。役員体制については、支部長を能見さまから工藤さまへ引き継ぐこと、新たな幹事として川内野さま(平成4年卒)が就任することが提案され、いずれも了承されました。川内野さまからはビデオメッセージでの挨拶が寄せられ、遠方からの参加が叶わなかった中でも、温かい思いが伝わる一幕となりました。

また、懇親会は藺田さま(昭和51年卒)のご発声による乾杯でスタートしました。話題は、九州支部会員数の推移、最近の詐欺メールや電話への注意喚起、福岡国際空港の将来構想、初孫の誕生報告、ホテル料金の高騰など多岐にわたる、終始笑顔と笑い声が絶えない時間となりました。限られた2時間のなかで話は尽きず、再会を喜

ぶ声や、今後の再会を誓うやりとりも交わされ、温かな交流の場となりました。

懇親会の締めくくりには、土井先生より大学および教室の最新情報をご紹介いただきました。教育・研究環境の変化や学生たちの活動の様子、そして今後の取り組みについての話は、参加者にとって非常に関心深く、懐かしさと新鮮さの両方を感じる時間となりました。

今後も世代や地域を越えて、多くの会員が気軽に参加できる場づくりに努め、九州支部のつながりを大切にしていきたいと思えます。

田中 仁志(平22年卒) 記



北陸支部総会報告

2025年6月14日(土)、北陸支部は富山県富山市の五万石本店にて、令和7年度支部総会を開催しました。本部から松尾哲司先生に出席いただき、北陸支部からは12名が出席しました。

総会に先立ち、松尾先生から計算電磁気学における磁性材料特性の現象論的／物理的モデリングに関する講演が行われ、磁性材料が持つ複雑なヒステリシス特性を精度良く、かつ簡便に表現するヒステリシスモデルなどを中心に関心の高い内容を説明いただきました。出席者からは様々な観点から数多くの質問がなされ、短い時間ではありましたが、活発な講演会となりました。

支部総会では、冒頭、笠原支部長から、就任6年目となり、支部のイベントを通して更に北陸支部の強い人脈が形成されるようにしていきたいとの挨拶がありました。続いて、松尾先生から本部・電気系教室の近況として、教員の方々の異動状況や学生のイベントなどについてご紹介いただきました。最後に、幹事から支部の近況報告、決算報告、支部役員案(今年度は変更なし)の説明を行い、満場一致で承認されました。

総会終了後、記念写真を撮影し、

その後、場所を変えて懇親会を開催しました。金森評議員(昭40卒)の乾杯で始まり、出席者が懐かしい思い出話に花を咲かせました。また、自己紹介や近況報告を交えながら、歓談を続け、楽しいひと時を過ごしました。会の最後では琵琶湖周航の歌を出席者全員で合唱し、中島顧問(昭40卒)の締め

の挨拶で散会となりました。次回の北陸支部総会は、例年通り来年5月下旬～6月上旬頃に、福井市内で開催する予定としております。日程等の詳細については、支部幹事より改めて案内いたしますので、是非多くの会員の方々の出席をお願い申し上げます。

金谷 賢一(平成19院卒) 記

支部役員(変更なし)

顧問	中島 恭一 (昭40)
支部長	松本 純也 (昭44)
副支部長	葛原 正明 (昭54)
評議員	笠原 禎也 (平元)
	久和 進 (昭47)
	金森 閔治 (昭40)
	柴田 明 (昭40院)
	西念 勉 (昭46)
	石丸 哲也 (平元)
幹事	林 正則 (平5)
	金谷 賢一 (平19院)



訃報

昭22	出口 弘	6	10
新28	串間 拓夫	7	4
昭30	植田 浩二	7	1
昭31	矢島 脩三	6	9
昭32	大西 茂	7	3
昭32	長 宥孝	6	5
昭33	高橋 徹	4	4
昭34	村上 敏	6	8
昭36	太田 忠一	7	2
昭36	近藤 映六	6	10
昭40	清水 義佑	6	4
昭40	松本 紘	7	6
昭40	近藤 浩一	30	1
昭43	田村 佳彦	6	9
昭44	佃井 彰彦	5	6
昭44	奥 亮三	7	2
昭44	山本 和紀	6	9
昭44	小嶋 丈夫	6	5
昭48	笠嶋 善憲	7	3
昭48	橋詰 明英	6	7
昭50	塩野 悟	30	
昭50	三津澤 修	7	2
昭54	奥田 大二	6	11
平19	長尾 和昌	5	1

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。



松本 紘先生(昭40年卒)ご逝去

本学名誉教授で、本会会長を務められました松本紘先生におかれましては、病気治療中のところ、去る令和7年6月15日に逝去されました。ご葬儀は、多くの方々による見送りの中、同月18日に執り行われました。会員の皆様にはメールによりすでにご案内申し上げましたが、会報にて改めてお知らせいたしますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

